

編集後記

＜古澤元之助＞

症例特集号を読むと、いつも思うのだが、よくもまあ、いろんな疾患と病態とがあるものと思う。永い間、胃と腸のいろんな疾患を診てきたと思っていても、一度もお目にかかったことのない疾患が本号に掲載されており、病変と病態の多様さに一種の不安と溜息が出る程である。また、今更ながら、内視鏡手技の普及が消化器病の診断と治療に大きく貢献していることも改めて知らされる。

本号に掲載された症例は教科書ではみられない貴重な疾患で、われわれの日常診療でも滅多に遭遇することはないかも知れないが、そういった疾患の存在の認識と病態の考察とは、日常診療に極めて有益で、そのような目で診療していると、思わぬ疾患の本質を見出すこともあろう。そういう意味で、本号の意義も深められるであろう。

最近、腸疾患に対する関心が増し、腸のいろんな病変が提示されているが、従来の疾患分類にはあてはまらないような疾患が意外に存在するように思われる。例えば、外山氏らの全消化管ポリープ症の1例などはそうであり、私も1, 2, 非特異的な潰瘍性の腸病変の中にも、既存の疾患分類にあてはめ難い病変が存在するように思っている。臨床症状、手術材料での肉眼ならびに組織所見を詳細に検討し、従来の疾患分類を十分にふまえた上で、これら疾患の詳細な分析が必要な時期に来ているように思う。そういった意味で、広く多くの症例が本紙の症例や研究欄に投稿され、疾患の本態や成因に関する斬新な意見が述べられて欲しいものである。

＜編集＞ 早期胃癌研究会